

# 仙林寺だより

NO. 61  
編集・発行  
松田正貴

## 行事報告

### 寺子屋「流しそうめん」

一日、お盆の月の寺子屋です。流しそうめん用仕掛けも一年ぶりの登場でようやく陽の目を見る季節です。いつもの強力な助っ人に、何と住職が竹割り職人としてまたお弟子の裕好さんも加わり最強の布陣に。お盆の紙芝居など聞いているのかいないのか、心はずでに満腹をめざすのか？しかし今年の大人は甘くない。お膳立てはそうめんを茹でるだけ。竹割り作業も体験し、一汗二汗。いよいよ放水となればいつもの景色です。二部構成の後半は二本の竹をジョイントしギネスさながら？の長さに。今年初めての試みは裕好さんの発案、固定観念に新しい風が吹き込むと、境内にも風情という心地よい風が吹き抜けます。おまけの部は裕好さんの一人舞台、竹水鉄砲、竹とんぼ、繰り出す技は職人技か、子供たちはおもちや作りと同時に刃物の扱得でも教えてもらい一挙両得でした。今月末には



### 夏休みプチ修行

裕好さんに新たな刺客が！先月の坂田嘉六氏（五十歳）に続いて今回はくつと若返り、福島大学付属中学校に通う加藤友紀君（十五歳）が修行者としてお目見え、一日から三日

まで寝食を共にしました。お寺での生活は、見るもの聞くもの初めてのことばかり、その様な中、禅の力りキラムに沿った修行をおくることが決して容易なことではないと思えますが、非日常の世界に身を置き、生活をまらんとお任せできる心地よさを味わってもらえれば、苦しい修行というイメージも、実は安楽へのいざないであつたものと認識を新たにすることになります。とは言えなにぶん十五歳です。ほんの数日受験勉強も一休み。しっかりと自分を見つめ直して頂きます。知識偏重の頭を解放し、心と身体にたっぷり栄養を蓄えて欲しいものです。今日もまた作務（掃除）に追われる一日の始まりです。

### プチ修行・本人談

あるきつかけで始めた仙林寺での坐禅、週に二度のペースでひと月が過ぎ、また今回夏休みを利用した四日間の修行生活を終えた今でも、坐禅の四十分間はとても長く同じ姿勢を保つことは出来ません。作務では境内での掃き掃除の時、住職さんは「ゴミが見えてなくても掃く」と



わけの判らない事を言います。その後境内付近の歩道や墓地内の清掃を先輩の裕好さんと一緒にしました。裕好さんの「明日の事より今やるべき事に成りきれば後悔しない」という言葉が心に残っています。また初めての夕食作りも体験しました。野菜を炒めたり魚を焼いたり家ではできない経験をしました。

四日目の夕方には本堂のお釈迦様の前で、迎えに来たお父さんと焼香をし住職さんから終了証をいただきました。受験勉強なしで過ごした四日間でしたが、忙しい中にも落ち着きた静かな時間が過ごせたような気がします。裕好さんとそして仙林寺で過ごした経験を大切にこれからの生活に生かしたいと思っています。

### 副住職より・・・裕好さんとの泊りがけ

の修行でした。受験を控えた大切な時期に、たとえ四日間とはいえ勉強なしの時間を作るのはそれだけで勇気のいる事と思えます。ただ親御さんにもまた友紀君にとつても、かけがえのないこの時をお寺での修行という形で過ごされた事は決して無駄にはならないものと思えます。「今この時、本当にやるべき事は何か？」人から与えられた作務をこなしているだけで良いのか、四十分間の坐禅を退屈な時として過ごしているだけで良いのだろうか、自分で考え自分で行動する事の大切さに目覚めなければならぬ年齢でもある友紀君。今回の経験をを通して是非「一歩前へ！」

### 如意輪観音祭礼

八日、体温を超えるような暑さの中、「餅観音さま」で親しまれる仙林寺如意輪観音様の祭礼が行われました。当日は猛暑炎天下にも関わらず四十名を超える参加者がありました。さて、如意輪様をよくよく眺めてみますと、ほうづえについて何となく無作法なお姿、皆さんの願ひ事が正しい事ならば叶えてあげようと思案中なのだそう。そういえば口ダンの考える人も同じような姿、考え中の様子に東西の差はないようです。また、六本ある手もかなり不思議、六の数字の意味するところは六道輪廻から衆生を救おうとする志しを表わしているとのこと。ところで、お盆の時期、お寺では「施食会」法要を修行します。釈迦十大弟子の一人目連尊者が、地獄に落ちた母を救おうと供養した事が起こりとされます。お釈迦様から言われたとおり、多くの僧に布施を施し懺悔滅罪を願います。地獄に落ちるほどの罪とは、お母さんが目連さんの事だけを大切に思えばかりに他の子供達には冷たく当たったその行いが原因とされま

す。このお話、何となく如意輪様への願ひ事が正しいかどうかを計るものさしのヒントになりそうな気がしませんか。せつかくお費

銭をあげるのなら、叶う先が明確な正しい願

をかけた方がいいのです。

## 楊柳観音祭礼

十五日、村岡・八幡台地区、楊柳観音祭礼が行われました。詳しくは「ひとこと」で。

### 弟子・裕好氏、僧堂修行へ

ふた月を共に過ごした裕好さんが二十五日早朝、遂に永平寺別院僧堂へと出立しました。前日夜、内輪だけの送別会では、裕好さんウオッチャー宮田さんが群馬から飛び入り参加、これもある意味仙林寺ホームムービーをご縁としたオフ会か？ 当日朝四時半、威儀姿格好を整えまずは朝茶を一服、雲水姿に変身した裕好さん微妙に二十年前の自分の姿とだぶります。思わずあの時の複雑な気持ちが見つくと同時に、全くの未知の世界に飛び込む緊張感もフラッシュバックしてきます。道すがら聞こえた音楽や車窓からの風景、お山（永平寺）に近づくにしたがって高まる不安感、裕好さんの姿を目の前にして、まるで閉じられた記憶の引き出しが一気に開け放たれたかのようで不思議でたまりません。ところで人の記憶を司る海馬では、記憶すべき事柄を重要度に応じて振り分け保存されるのだそうです。大切な宝物を保存するにはそれなりの場所を選ぶように、重要と思われる記憶は忘れ去りにくい場所に貯蔵されているものなのでしようか。そしてまたその記憶を呼び戻す鍵も、案外単純に探し当てる事が出来るようになってきているのかもしれない。恰もユークーアイDや忘れたパスワードを思い出すためのキーワードを自動登録しているかのようです。僧堂修行は、その人の人間性までも変えるほど強烈なストレスを与えられます。人生経験豊かな裕好さんですが、僧堂に入ればゼロスタート。ただ僧堂を舞台、指導役の雲水を劇を演じる俳優と置き換える事で、不条理なお叱りもまた然りか。名演技を引き出してあげるのもまた同じ舞台で踊るちよつと後輩のお役目かもしれません。変えよの無い脚本、個性派の監督と環境設定の融通はききません。あとは演じ方を考えるしかないようです。修行の場所は変わっても演じ

方は唯一つ。そこに気が付けば再会の日もそう遠いことではないのかもしれない。

### ひとこと 「柳に風」

#### 楊柳観音祭礼にて

楊柳観音様の別名は薬王観音様、仏の世界のお医者さまです。三十三観音の一人に数えられるほど有り難い観音様として知られております。手には柳の枝を持ち、衆生をお救いになるとの事です。なぜ柳の枝なのか、少し考えて見たいと思えます。仏教ではこの柳、一切樹木の王とされ、仏様に供える聖木としては最高のものとされています。また、柳の樹皮には鎮病効果が有り煎じると解熱剤にも、頭痛薬で有名なアスピリンは薬効成分サリシンを成形させたものだそうです。私達の生活で身近なものをもう一つ、楊柳の楊の字を使った日用品に楊枝（子）があります。楊はやなぎを意味する事から、柳の小枝を使った事が語義となつています。「禍の門」とされる口中の毒気を除く事は釈迦様もお弟子様方にすすめておられるようです。また日本にはじめてこの楊枝を使う習慣を伝えたのが道元禅師様であつた事はあまり知られていないようです。いづれにしましても入り口を清浄にすることで、身体を健康に保ち、心の中までも清めようとする習慣付けを考へられたものでしょう。最近になつて口内環境の悪化が内臓の疾病にまで及ぼす影響が取り沙汰されるようになっていくようにですが、二千五百年も前からお気付きの方が居られたようです。後白河法皇の時代から頭痛の守り神様としても崇められる楊柳観音様ですが、この頭痛ゆとりの無い性格や、余裕の無い生活からのストレスも原因の一つでしょう。「柳に風」とも申します。また「柳に枝折れ無し」とも申します。柳のようにさらさらと世間の風を受け流す事で、頭痛の種を吹き飛ばす突風もまた吹いてくれるものと信じたいものです。

## もうひとこと

### 平成十八年お盆 施食会にて

最近のニュースを見ますと、幼児や児童がらみの痛ましい事件が特に多いように感じられます。秋田で起きた事件、また泉崎村でも三歳の我が子に食事を与えずに衰弱死させるなど、信じられないような親子をめぐる事件が起きております。親子という縁を頂きながら、最も信頼すべき親に裏切られた幼いのちに冥福を祈らずにはおれません。さて、ここで、失われた命の追悼に、この命とは何なのかを考えてみたいと思えます。ところで、感謝の心を表す美しい言葉に「有難う」があります。この言葉、実は古いお経が元になっております。法句経という古いお経の中に「人が命を受けるのは有り難し、やがて死すべきもの、今いのちあるは有り難し」とあります。このように「有難う」の元々の意味は、得がたい命の尊さを言つたものでした。この有り難い命を頂いた我々ですが、現在世界の人口は約六十一億人といわれております。また生命が誕生したのは四十億年前という事です。生命の誕生から現在に至るまで私たちには数え切れないほどの先祖様が存在しました。両親、祖父母と遡っていくと、十代で二千人、わずか三十五代で六百八十七億人、なんと地球上の人口の十倍の先祖様が居るわけです。もしたつた一代でも欠けてしまえば、今ここにこうして居る事さえできなかつたのです。私たちがこの時代にかけてがえの取り替へることのできない命を頂きました。このように考えるとき、受け継がれた命に自然と感謝の心が湧いてくるものと思えます。お盆とは、まさしく先祖様との縁を見つめなおす大切な機会です。はるかに繋がるご先祖様との縁を見つめなおし、今あるこの命を大切に後の世へと繋いでゆきたいものでございます。